



# ジェネリック・スキルと 成績評価

九州国際大学法学部  
法学部長 山本啓一

# 報告の概要

- 【問題の背景】本学では、これまでジェネリックスキルやリテラシーの育成という観点には希薄。ジェネリックスキル(特にリテラシー)とは、学生の「地頭の良さ」に近い。本学の課題の一つは、学生のリテラシー育成の仕組みを組織的に構築すること。
- 【問題の所在】本学生が受講したリテラシー・テストのスコアと学生の様々な成績データとの関連性を検討。①大学は学生のリテラシーを正しく評価できていない、②リテラシー・スコアは、入学時の学力(入試形態との関連性が深い)に大きく依存している、ことが明らかになった。したがって大学教育を通じたリテラシー育成は不十分。教育改革の外部指標として本テストを活用したい。
- 【問題解決のアプローチ】法学部の改革の方向性は、「法律学の学習を通じて(社会に通用する)基礎学力の育成」。学生のリテラシー育成をめざす授業を試行的に開始。授業の成果や評価方法、今後の課題を明らかにする。

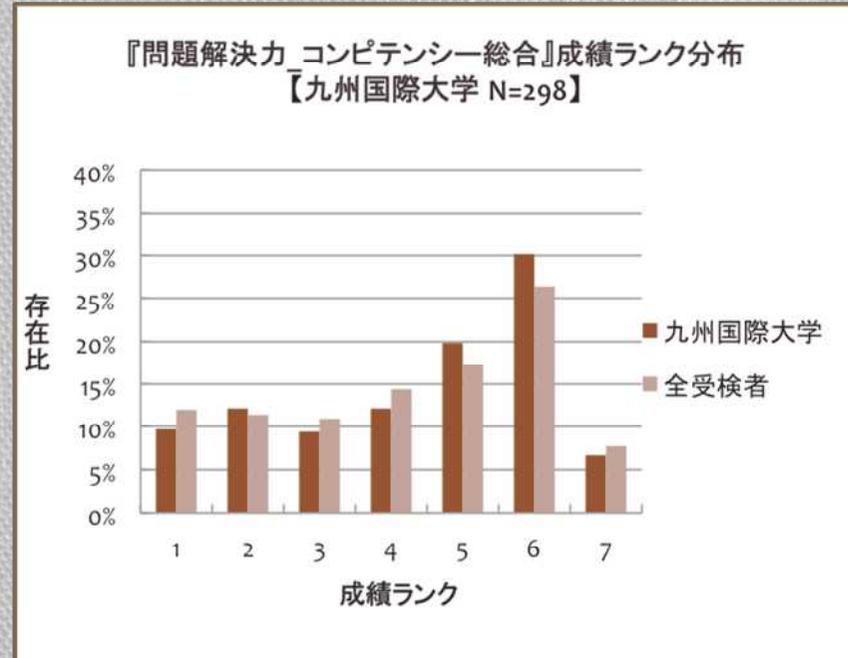
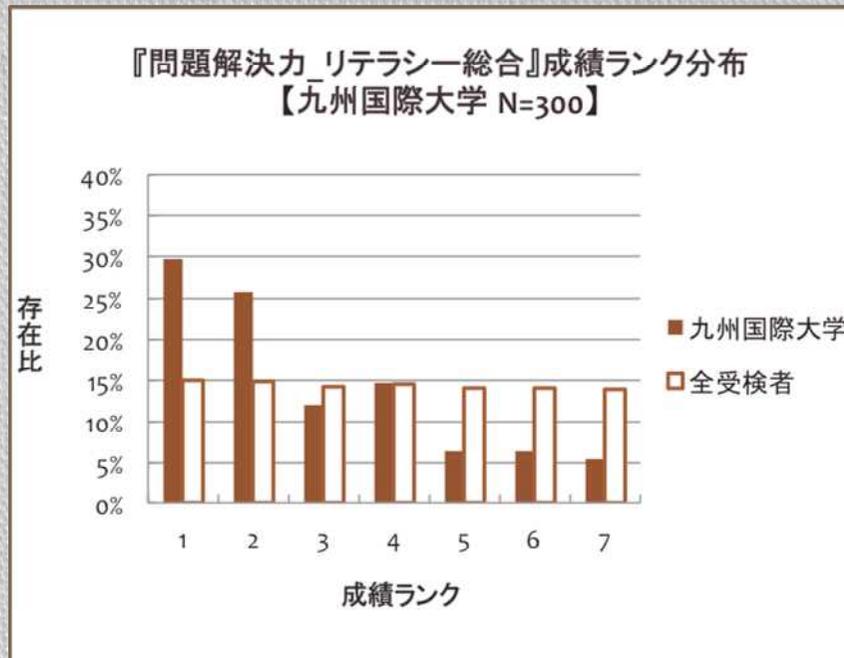
# 1. ジェネリックスキル(リテラシー)について

- 「地頭の良さ(ジェネリック・スキル)」は育成できるのか？ ジェネリック・スキル(リテラシー)は、すべての段階の教育を通じて育成されるべきものであるが、大学でもリテラシー育成に力をそそぐべき。
- 現実には、高校までに育成されるべきリテラシーを欠いた学生が入学する。リテラシーが低い学生に従来通りの(あるいはその内容を薄めるだけの)授業を行っても、学生の理解度は進まず、能力は伸びない。
- ユニバーサル大学は、「リテラシーを持った学生を前提とした教育」から、「大学教育を通じてリテラシーを育成する教育」への転換が必要。「獲得した知識・技能・態度等の総合的な活用」(中教審答申)は、「学士課程教育の質保証」の要件の一つ。
- 本学法学部のDP...「法律を使って考える」「問題を解決する」「大学で学んだ知識を活用」＝「専門教育を通じてリテラシーを育成する」こと
- 法学部の出口→「公務員・警察官・消防士」... 公務員に必要な能力は、「基礎学力」と「学習能力」→ジェネリックスキル
- 本学学生の課題は「基礎学力」の育成→「就業力育成」

## 2. Progテストと「成績」の関係

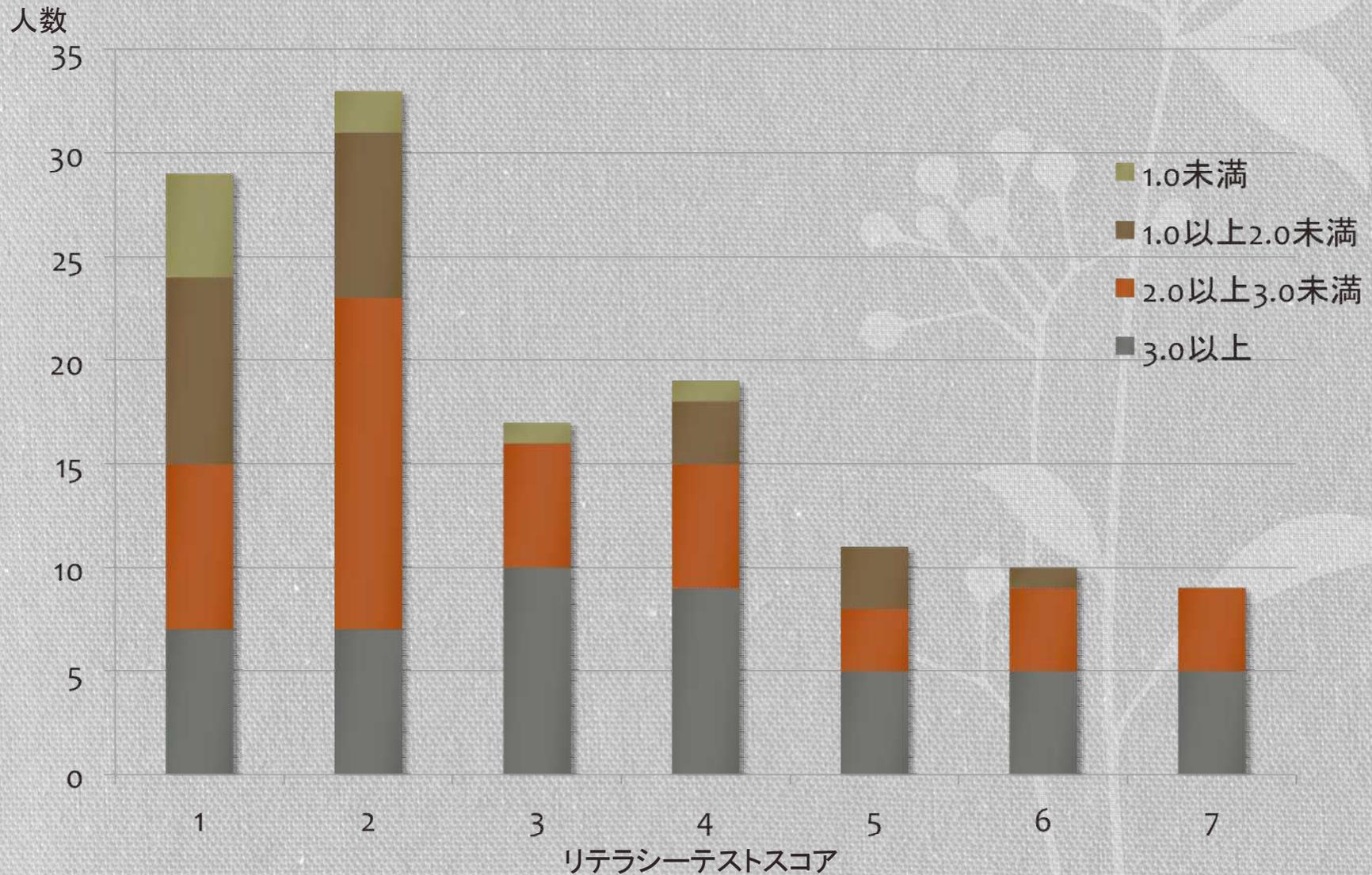
- GPAとの関連性は上位の学生ほど薄い。その理由は、第一に、本学の成績が、学生のリテラシーを反映したものになっていないことが考えられる。これは「知識の活用」という側面を授業で扱っていないというのと同義である。第二に、「平常点」などの学生の努力姿勢が評価に組み込まれてしまい、学生の生の評価(期末試験の素点など)が曖昧にされていることも考えられる。
- 「成績のよい学生の方が就職に苦労することがある」などと言う教員もいるが、その理由は、大学が学生のジェネリックスキルを正しく評価できていないからではないか。教員の多くは学生の能力をきちんと理解していない。
- 主観的には、リテテストの結果は納得できる。リテが高い学生はやはり「地頭がよい」学生が多いと思う。授業やゼミの中で、予期しない質問を出した時にすぐに答えられる学生、応用問題を問う問題で成績がよい学生など。

## 2-1 基礎力測定テスト団体成績



学年	受験者数	リテラシー平均	実施日
1年生	162名	2.6	5/27
2年生	127名	3.0	5/31

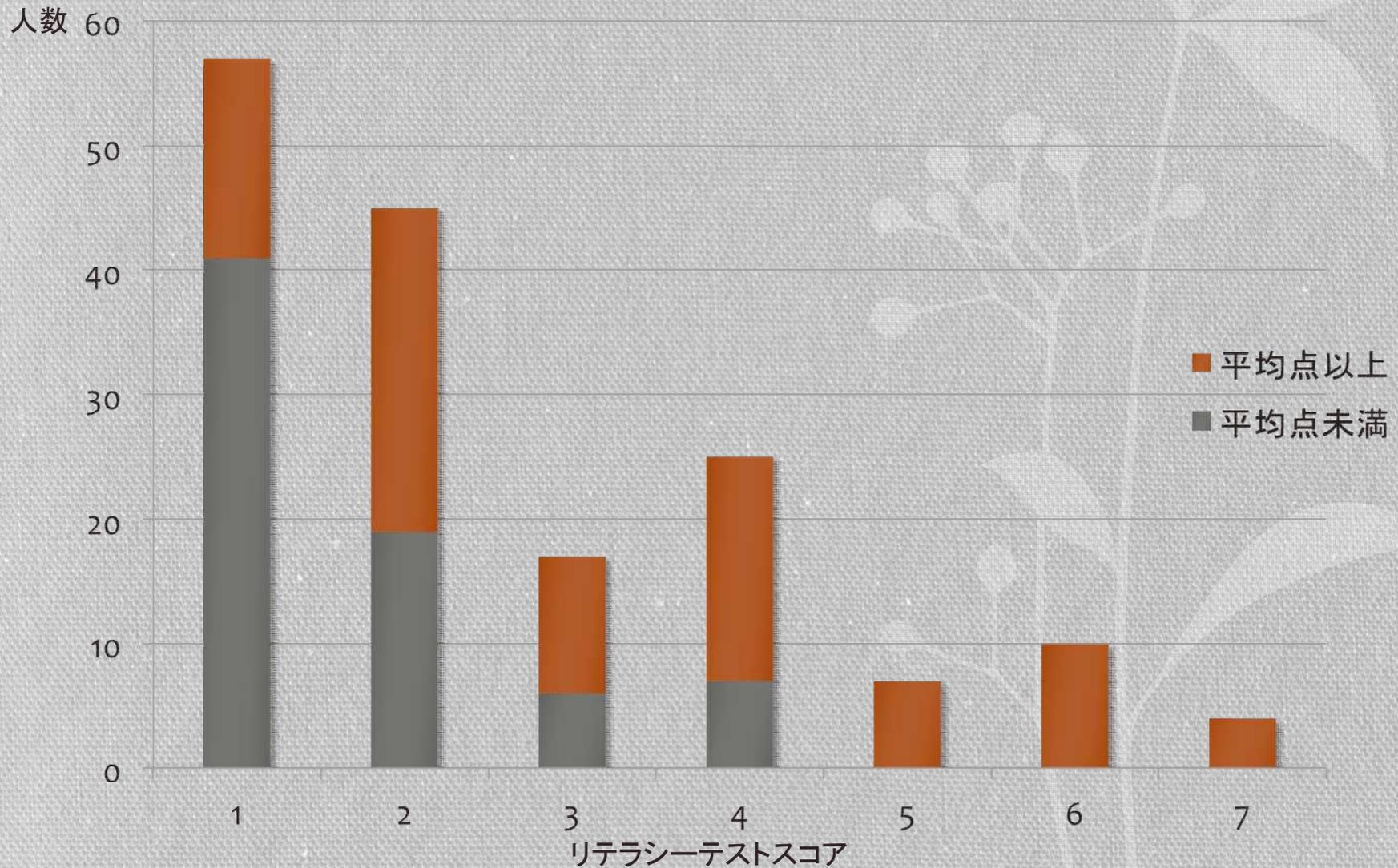
## 2-2 2年生 (2011年リテ v.s. 2010年GPA)



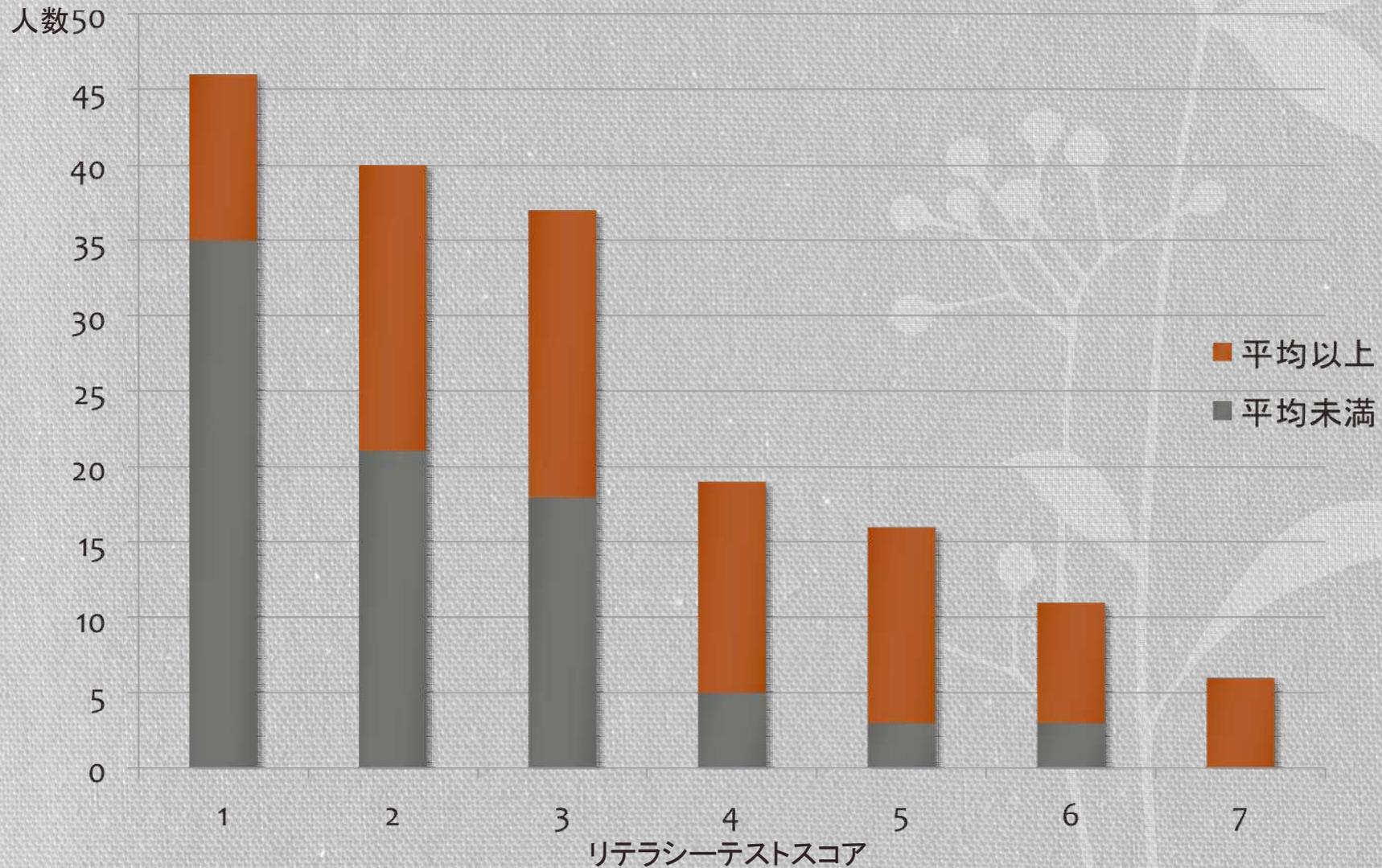
# プレイスメントテストとリテラシーテスト

- 本学の学生のリテラシーテストのスコアに大きな影響を与えているのは、高校までの基礎学力である。つまり、本テストのレベル3～4前後の設問を解く能力は、実は、高校までの英・国の能力と相関している。これは、学生のリテラシースコアを入学時のプレイスメントテスト(英・国)の平均点以上・以下で分けると、はっきりとわかる。
- 1年生はプレイスメントテストとの関連性が高いことがわかる。2年生になると若干分散されるがそれでも影響はかなり残っている。2年生の中には、入学直後のプレイスメントテストが低かった学生でも、リテラシーを向上させている学生がいる。ただし、その要因が何か(どの授業が影響を与えたのか)は分かっていない。

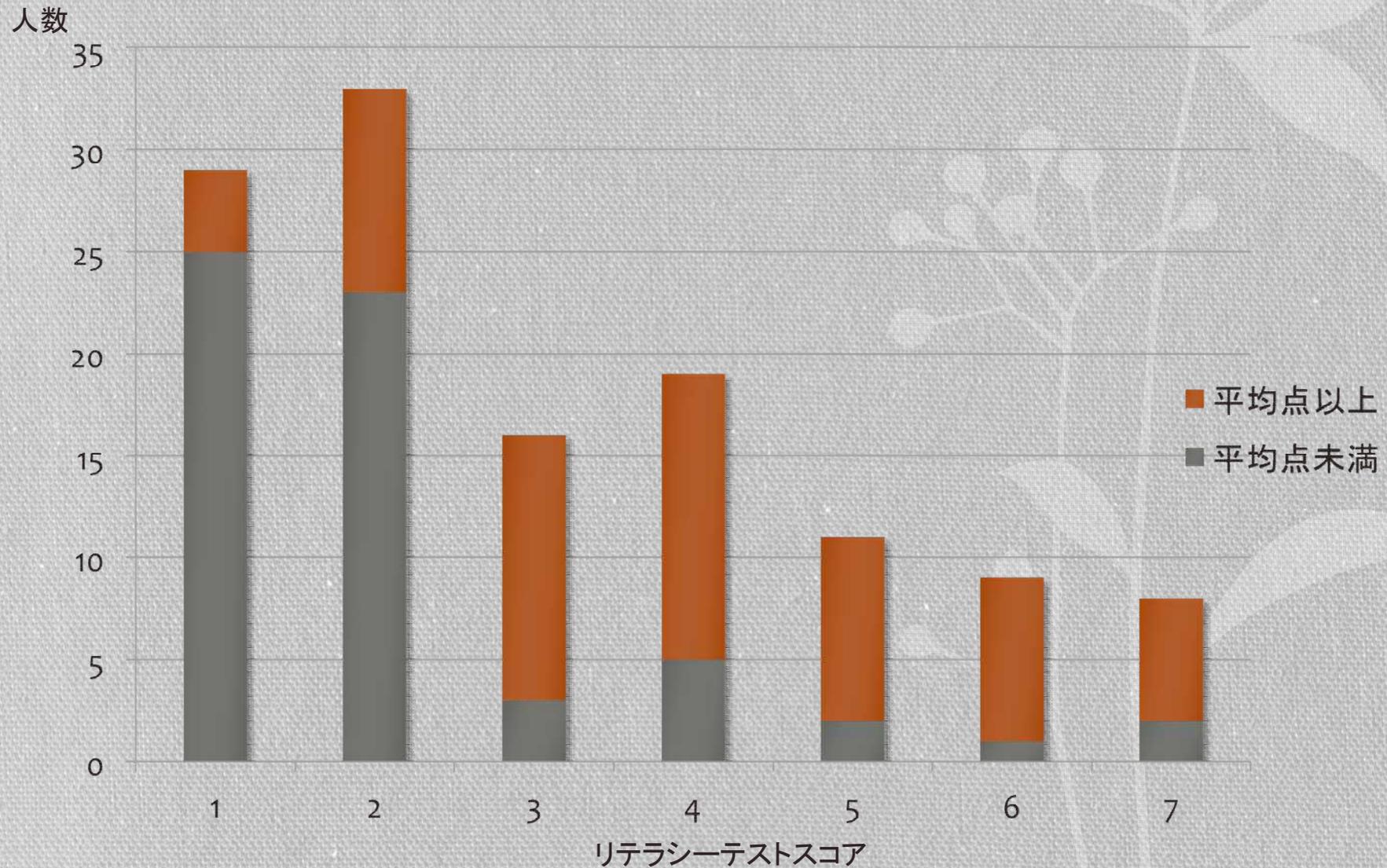
## 2-3 1年生 (2011年リテ v.s. 2011年プレイスメント)



## 2-4 2年生(2010年リテvs 2010年プレイスメント)



## 2-5 2年生(2011年リテv.s. 2010年プレイスマン)

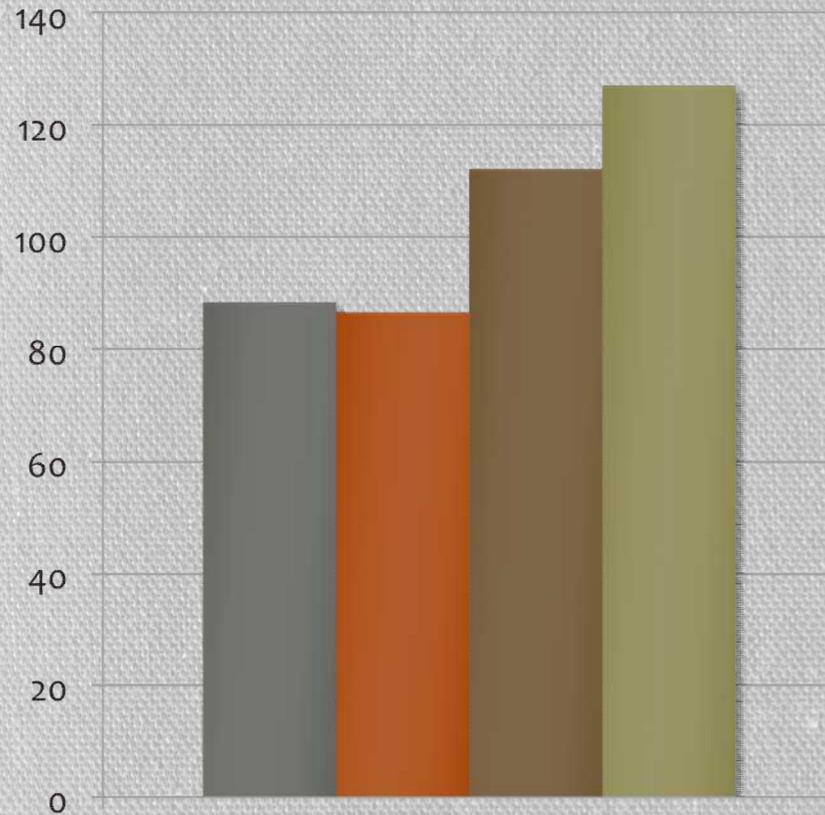


## 入試形態とリテラシーテスト

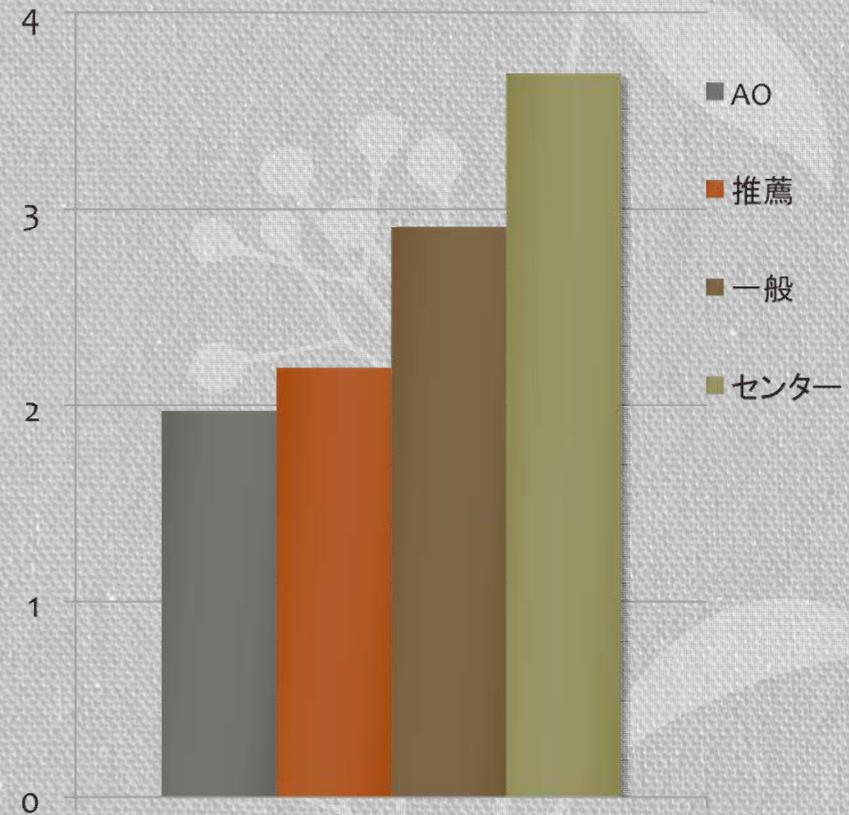
- 入試形態によって、プレイスメントテスト、1年次GPA、リテテスト、そしてコンピの差が説明する。つまり、受験勉強の有無はリテラシーに決定的に影響を及ぼしているといえる。
- 大学の教育力が高校での成果を上書きできていない(=大学の教育力が相対的に低い)とみることができる／みるべきである。
- リテが若干の上昇にとどまっている一方で、コンピはかなり上昇している。大学生活の様々な体験が影響を与えているのだろう。ゼミが大きな役割を果たしたと考えるのは楽観的すぎる。実際はアルバイトやサークル活動などが大きいだろう。
- 本学は、教育改革を一層加速させ、入学時の学力がどうあれ、上位・下位に関わらず、すべての学生の能力を引き上げる仕組みを構築しなければならない(それは「質的保証」の根幹に関わることである)。

## 2-6 1年生入試形態別平均点

得点

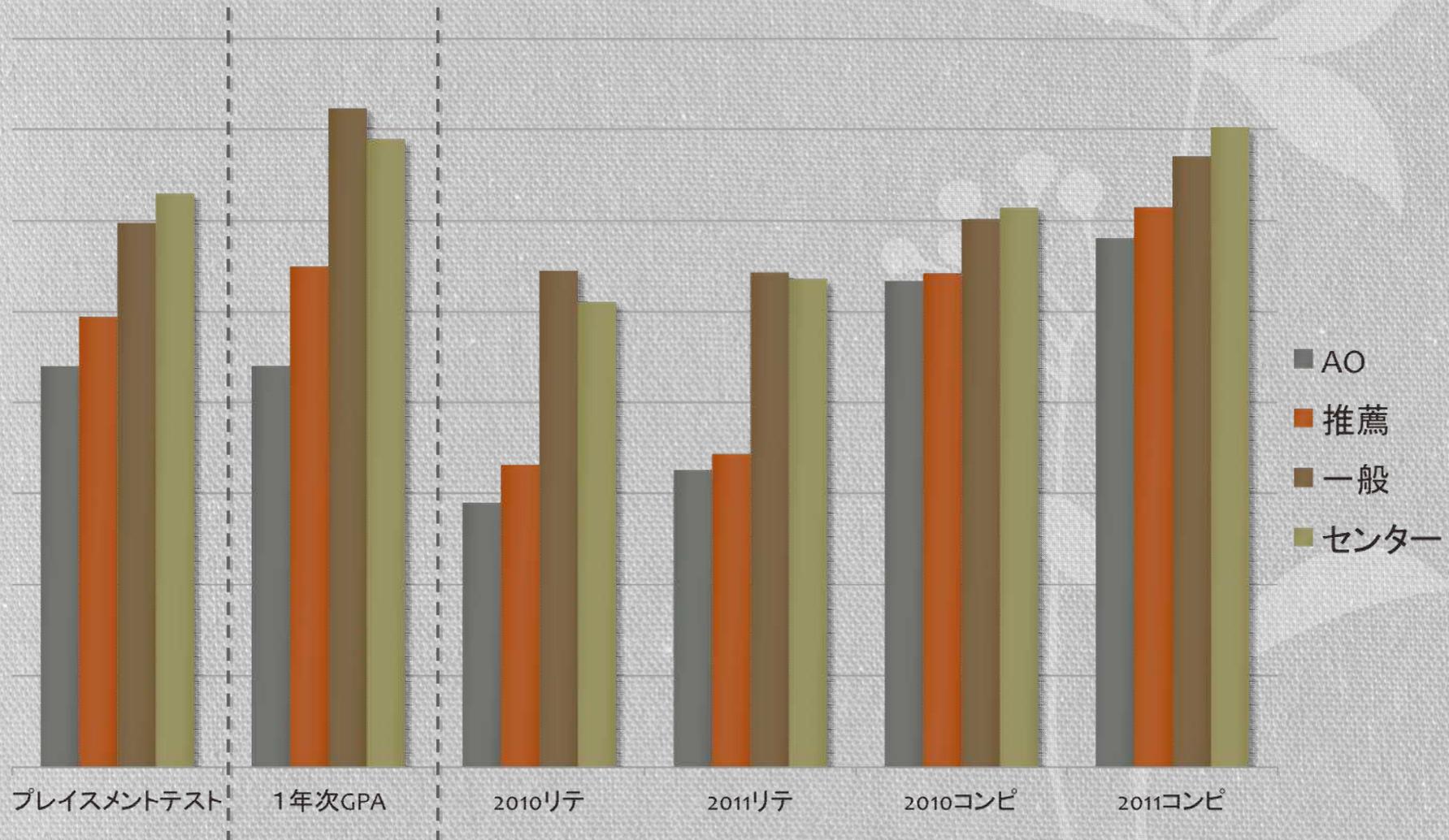


プレイスメントテスト



リテラシー総合

## 2-7 2年生入試形態別平均点



### 3. ジェネリックスキル(リテラシー)向上の取組

- 今年度より、就業力育成支援事業採択と並行して、「学生の能力を段階的に鍛える教育」の模索へと方向を転換。カリキュラム改革、シラバス改革、授業評価改革の検討を開始。
- 先行的取組として、1年向けライティング・スキル育成科目(教養特殊講義)を開講。複数の教員が担当する少人数クラス制。共通のシラバスで実施。その他、「法律学入門」「民法入門」を同様の形式で開講。
- 教養特殊講義の達成目標... ①与えられた課題から書く材料を見つけられる、②設問のポイントを正しく読み取れる、③別の視点からも考えられる、④原因を明らかにして説明できる、⑤文章の内容を要約できる、⑥データ・図表を読み取れる
- 事前研修(ワークショップ)、共通の中間テスト、共通の期末テスト(河合塾成田秀夫氏に作成を依頼)を実施。
- 「形成的評価」(指導の途中で学生の理解度を随時評価)が授業改善のうえで重要。学生の「努力」に丸められない「素点」の分析がポイント。

## 3-1 課題の難易度とリテラシー

課題Aと課題Bではどちらの方が難問か？

課題A「ホッブスとルソーについて与えられた資料を読み、二人の思想家の対比的な考え方を踏まえた上で、なぜ人間社会において法律は必要なのかという点について、あなたの意見を400字以内で述べよ。」

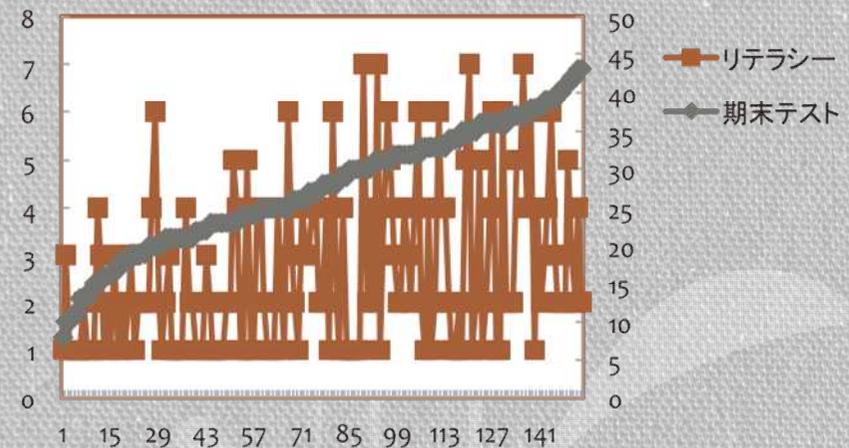
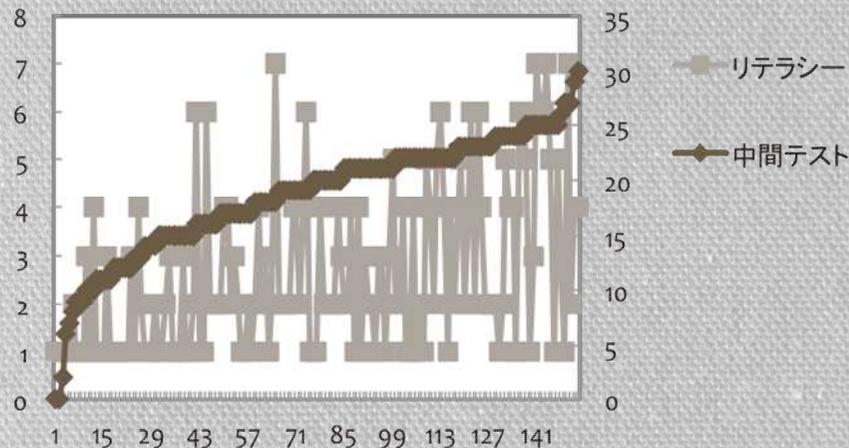
課題B 次の3つの日本経済に関する表から読み取れることは何か。40字以内でまとめなさい。

一人当たりGDPの世界ランキング推移		世界GDPに占めるシェアの推移	
2000年	2008年	1990年	2008年
3位	23位	14.3%	8.9%
<small>【出所】IMF World Economic Outlook Database</small>		<small>【出所】IMF World Economic Outlook Database</small>	
IMD国際競争力順位の変遷			
1990年	2008年		
1位	22位		
<small>【出所】World Competitiveness Yearbook</small>			

→課題Aより課題Bの方が圧倒的に達成率が低い。

## 3-2 教養特殊講義成績データ

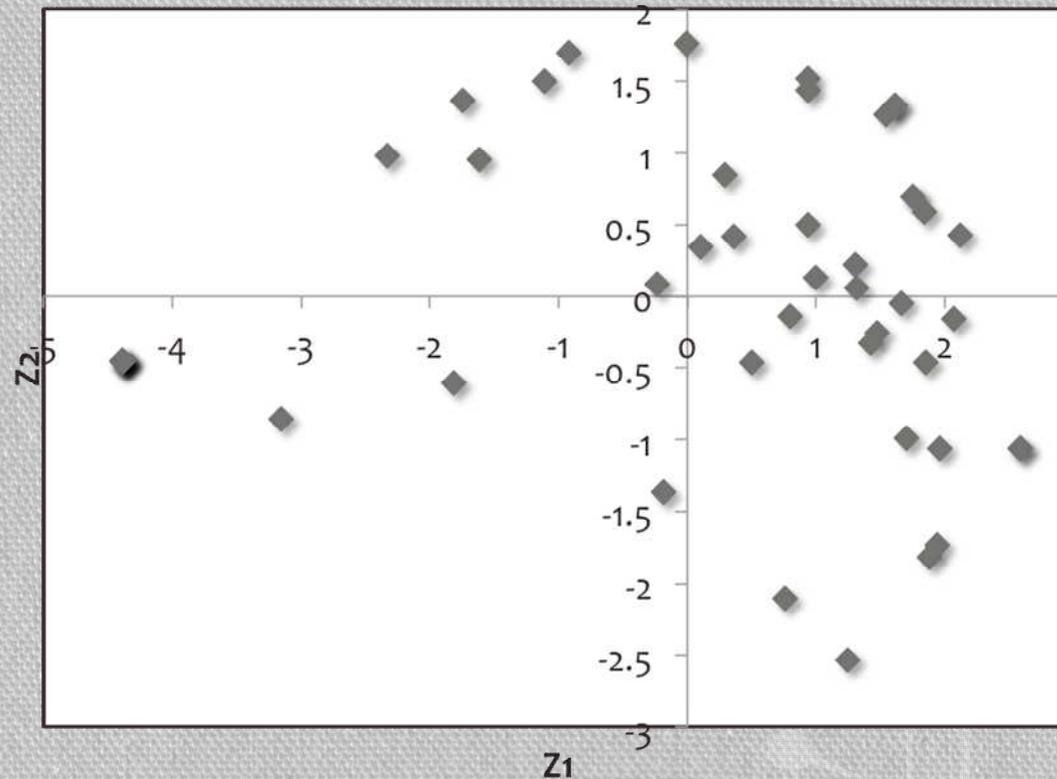
	実施日	作成者	平均	標準偏差値	偏差平方和	リテラシーとの相関係数
中間試験	7/1	教員	65%	5.454	4521.53	0.183
期末試験	8/5	外部	55%	8.068	9894.21	0.104



中間試験より期末試験のほうが全体のばらつきが大きく、個々のデータのばらつきも大きい。→期末テストの方が「難しかった」。ただし、「中間テスト何点・期末テスト何点という、「ざっくりとしたとりかた」では、分析は不十分。

## 3-3 法律学入門(Aクラス)期末試験主成分分析

主成分得点(相関行列)



設問間の関連性を分析。主要な因子が複数含まれている。学生の評価を偏りなく多面的な視点から評価し、学生のリテラシーを今後伸ばしていく可能性を含んでいる。

## まとめ

- 高校までの学力差を上書きできる教育力が大学に必要。
- リテラシー育成の観点から教育を考える必要がある。「学生はレポートが書けない」と嘆くだけでなく、学生の足りないスキルを具体的に把握し、その能力を育成するプログラムを作るべき。
- そのためには、学生の現状を把握すること(＝診断的評価)と、授業をすすめる中でリアルタイムに学生の理解度を把握すること(形成的評価)と達成度(総括的評価)の分析が不可欠。
- ざっくりとした評価ではなく、個々の設問の関連性を見るための評価方法を検討し、学生のリテラシーを向上させる「独立した教育効果」を探す。その上で、「良い問いとは何か？」に関するモデルをつくるべき。Progテストは外部指標の一つとして活用できる。
- 今後の課題...リテラシーの概念の明確化・マップ化、評価方法・育成方法の明確化。「学生がどのような問いに答えられるようになればよいか」という発想から、カリキュラムの設計と授業の設計が必要。